櫛の文字

野村胡堂

一

「親分、良い陽気ですね」

「何んだ、八にしちゃ、大層お世辞が良いじゃないか。何にかまた頼みたい事があるんだろう。金か御馳走か、それとも色の取持か。どっちだ」

銭形平次と八五郎は、斯んな調子で話を始めたのです。

「そんな気障なんじゃありませんよ。金はふんだんにあるし、うまい物は腹いっぱいに食べているし、女の子はうるさいほど付き纏うし、この様子じゃどうも身が保てねえ」

「馬鹿野郎、張り倒すよ」

「ヘッ自分は張り倒されて見てえ位のもので、近頃はもて過ぎてポーとしていますよ」

八五郎はそう言って、八つ手の葉っぱのような手の平を、自分の耳のあたりでパッと開いて見せるのでした。

「呆れて物が言えねえ。少し何うかして居るんじゃないか、八」

「どうもしたわけじゃありませんよ、今日は、一番親分の智恵を試しに来たんで」

「言うことが一々疳にさわるな。お前に試されるような智恵は、横町の隠居に貸してやったから、今日は生憎だ」

「ヘッ、智恵の時貸しは驚いたな、――尤も、こんなのは平常使いの智恵袋で結構で――、これですよ、親分」

八五郎が懐中から取出したのは、小菊に包んだ小さい品物でし

た。受取って開けると、中から出たのは、飴色の鼈甲の――少し時勢遅れの大振りな櫛が一つ。

「これは何んだ」

「櫛ですよ」

「櫛はわかっている――まさか熊手と間違やしめえ」

「その櫛に曰くがありそうなんで」

「どこの新造に貰って来たんだ」

「今頃こんな古風な櫛を差す新造はありませんよ、――私の伯母の知合――と言ったところで、死んだ亭主の墓詣りに行って懇意になった、谷中の養仙寺前の茶屋の嫁が、里の母親が死んで一年半も経ってから、形見に貰ったこの櫛が、どうも腑に落ちないことがあるから、八五郎親分に見て貰い度いって、伯母のところへ届けて来たんですって――そう言われると、結構な鼈甲の肌に、引っ掻きのような、仮名文字のようなものが見えますね」

八五郎の説明が、七面倒に持って廻る間、平次は指先で撫でたり、陽に透したり、いろいろの角度から櫛を眺めておりました。

「じゃ、八五郎親分が鑑定してやるが宜い。お前の智恵試しに丁度誂え向じゃないか」

「ところが駄目で」

「兜を脱いだのか」

「あっしの智恵袋が綻びだらけで、ヘッヘッ、おまけに字を読むことと、新造を口説くことは親の遺言で止められて居ますよ」

「だらしがねえなア、それ御覧」

「ヘエ」

平次は鼈甲の櫛を斜に、斯う陽にすかして見せ乍ら続けました。

「これほどよく磨いた櫛の背に、傷のような、引っ掻きのようなものが見えるだろう」

「え、え、それは見えますよ」

「針で彫った仮名文字だ、鼈甲は柔らかいから、わけもなく傷が付く――いや待てよ、柔かいと言っても、女の使う縫針くらいじゃ、こんな形の確かな字は書けないな」

「すると」

「待て待て、此ままでは読めまい、――少しは櫛を汚すが、構わないだろうな」

「構やしません」

平次は八五郎の返事を背に聴いて、お勝手へ行くと、念入りに櫛を洗い始めましたが、大方脂を洗い落した頃、よく紙で拭き取って、その上へ磨り立ての濃い墨をたっぷり塗り付けます。

©2018 萩 柚月

「これを拭きさえすれば宜い、――それ見な」

ざっと乾かした櫛を、紙で柔かく拭いて行くと、櫛の表の針の引つ掻きに墨が残って、いとも鮮(あざ)やかに読み取れるのです。

「ヘエ、驚きましたね、これが読めるんですね、ヘエ」

感に堪えて、八五郎の長んがい顎(あご)がそれを差覗きます。

「仮名で十九文字、斯う書いてある、『よさくさにやれみりゐけひぬげやいほてぬ』――解ったか、八」

「――あびらうんけんそわか――見たいなもので」

「馬鹿だなア」

「でなきゃ、火傷(やけど)の禁呪(まじない)」

「こいつは隠し言葉だよ」

「ヘエ？」

「そのお茶屋の嫁の母親というのが、娘に知らせたいことがあったが、あけすけに書けないので、こんな判じ物の隠し言葉で書き遺したのだろう」

「ヘエ」

八五郎はすっかり感に堪えました。

「それにしちゃ、文字が確りしているが、よっほど気性の確かな人だったと見える」

「それじゃ、親分の智恵で、ちょいと絵解きをして下さいよ――」

「そんなわけには行かないよ、いろいろの隠(かく)し言葉も読んだが、こいつは少しむずかしそうだ」

平次は深々と腕などを組んでおります。

二

「親分は今までに、いろいろの隠し言葉を解きましたね、一字送り、逆読み、耶馬台読み、魔法陣読みなどと」

「――」

「その術で、こんなのはスラスラと読めるんじゃありませんか」

八五郎はもどかしそうに言うのでした。一字送りというのは、いろは四十八文字の表を繰って、書いた暗号文字の次の字を拾って読む方法。二字送り三字送りは、二つ目または三つ目の仮名を読む方法、逆読みはいろは文字の一つずつ上のを読んで行く方法。そして耶馬台読みは、吉備真備の伝説の耶馬台の詩を読むように、四角に書いた文字の真ん中の一字から読み始めて、鍵の手にグルグルと読んで行く方法で。最後の魔法陣読みは、一から九までの数字を、三つずつ四角に並べ、何処から勘定しても十五になるように配列した表と照し合せ、その数字の順序に読んで行く方法です。

「これは、そんなに手軽に読める隠し言葉ではないよ、少し考えさしてくれ」

平次の顔のむずかしさ。それに相対して、八五郎も高々と腕などを拱きましたが、しびれがきれたり、鼻の穴が痒くなったり、どうも結構な智恵は浮かびそうもありません。

「出来たッ」

八五郎はいきなり膝を叩きます。

「何んだ、びっくりするじゃないか」

「よさくさはあさくさじゃありませんか、――浅草にやれ――とこ

う読むんで」

「みりゐけひぬげは何んだ」

「まだ其処までは考えていませんよ」

「それじゃ何んにも分らない、――が、俺にはどうやら解けたらしいよ」

「ヘエ、――浅草じゃなくて、上野か、芝か」

「そんな気楽な話じゃない、――これはいろは四十八文字の表を、この隠し言葉で辿って千鳥がけに読み変えて行くのだ」

「ヘエ？」

「例えば、斯うだ、よとあるのは『をわかよたれ』のよの前のかの字だ。次のさとあるのは『あさきゆめみし』のさの次のきの字だ、斯んな具合に三番目はくの前のおの字、四番目はさの次のきの字、――一つ置きにいろは歌の表と睨み合せて、隠し言葉の後前後前と千鳥がけに読んで見るが宜い、多分斯うなるだろう、――おいお静、硯と紙を持って来な」

「ハイ」

先刻櫛へ墨を塗り込んだ硯を持って来ると、平次は懐ろ紙の皺を伸して斯う書き下したのです。

かきおきはまたしちのまもりぶくろにあり

「あッ、読めますね、こいつは」

「――書き置きは又七の守り袋にあり――と読むんだろう。こいつは曰くがありそうだ。行って見ようか、八」

「行きましょう。養仙寺前の茶屋、竹原屋へ行って、嫁に訊いた

らわかるでしょう」
「斯うなりゃ、退屈様々だ」
「なんだいそれは、八？」
「退屈でもして居なきゃ、親分はこんな餌にはかかりませんよ」
「岡釣りと間違えてやがる」
そんな事を言いながらも平次は、この鼈甲の櫛の暗号文字から、妙に割り切れない謎を感じていたのです。
谷中の養仙寺前の竹原屋というのは、相当大きくやっている茶屋ですが、平次と八五郎が飛込んで聴くと、
「嫁の里の跡取息子が亡くなって、嫁と伜は飛んで行きましたよ」
留守番をしている、少し耳の遠い姑が言うのです。
「里の息子――というとこの家の嫁の弟だね」
「ヘエ、実の弟で又七と言いますが、――母親が再縁したので、嫁も嫁の弟も、今の父親とは義理ある仲ですよ」
「その息子が死んだのは何時だ」
「昨夜だそうで」
「家は何処だ」
「千駄木の地主で、中屋万蔵と訊ねて下さればわかります」
「何んだ、中屋の万蔵が、この家の嫁の里だったのか」
平次も八五郎もそれはよく知っております。駒込切っての大地主で、山の手一円に知られた豪家です。

三

千駄木の大地主、中屋万蔵の豪勢な家は、陰気臭く静まり返っ

て、気ぜわしく出入りする人々も、足音を忍ばせるような、妙に滅入った姿でした。

「いきなり乗込むんでもあるまい。お前は竹原屋の嫁を知っているだろう」

「ヘエ、よく知っていますよ、まだ二十一の半元服の、そりゃ良い女ですよ」

八五郎は大呑込みで、襟を直したり、十手を内懐ろに突っ張らせたりしております。

「何を所作(やっ)て居るんだ」

「斯(こ)うでもしなきゃ、亭主野郎が焼餅を焼きますよ、精いっぱい御用風を吹かせて――」

「好い気なもんだ」

そんな事を言って見送る平次のところへ、まもなく八五郎は、綺麗な新造を一人、追つ立てるように連れ出して来ました。

「親分、これがお春さん――竹原屋の新造ですよ」

「そうか、俺は神田の平次だ。大した手間は取らせない、ちょいと顔を貸してくれ」

「ハイ」

平次はお春を物蔭に誘(さそ)い入れながら、

「八、お前はそこを見張っていてくれ。人が来たって、構やしないが、立ち聴きされちゃ面白くない」

「あつしは聴いても構いませんか」

「馬鹿野郎、聴いて悪いと思ったら、そのでっかい耳の穴へ、二三本ずつ指でも突っ込んで置け」

「ヘッ、驚いたなア」

八五郎は向うの方へフラフラと立去りました。

「お春さんと言ったね」

「ハイ」

それは若々しい町女房でした。色白で、愛嬌者らしくて、少し蓮葉で、そのくせ性根の確りしたところのある、典型的な江戸の若女房型と言っても宜いでしょう。

「弟の又七が死んだそうだな」

「ハイ、可哀想に、――弱い子ではなかったのですが、町内の本道も首を捻っておりました。お寺で引受けてくれると宜いが――と父親も心配しております」

「父親？」

「私も、弟の又七も、母の連れっ子でございました。中屋の父には二人とも義理ある中で」

「ところで、守袋はあったのか」

「？」

「お前の弟の肌身に着けている守袋の中に、亡くなった母親の遺書が入っていた筈だ――そんなものは見えなかったかと訊いているのだ」

「いえ、何んにも」

お春の大きい眼は、覚束なくも瞬きます。

「八が持って来た、鼈甲の櫛の謎を、ようやく解いたのだよ。あの櫛には――書き置きは又七の守袋の中にある――と書いてあったのだ。ところで、あの櫛を届けてくれたのは誰だ」

「番頭の音吉どんですよ、――あの人は亡くなった母に頼まれていた癖に長いあいだ忘れていたんですって」

「あの櫛はいろいろの事を教えてくれたよ。お前の母親が何にか知っていたのかも知れない」

平次はこう説明してやったのです。

「まア、――怖(こわ)い」

「何が怖いのだ」

「何んだかわかりませんが、――そんなお話を聴くと、私は恐ろしくなります」

単純で綺麗な町女房の神経は、理屈も根拠もなく、本能的に戦(おのの)くのでしょう。

「お前の母親は、どんな病気で死んだんだ」

「ブラブラ病いでございました。癆症(ろうしょう)だったかも知れません」

「平常(ふだん)何にかこぼして居なかったか」

「いえ、――自分ほど幸せな者はないと、口癖のように申しておりました」

「亡(な)くなったのは？」

「お寅さんが来た年ですから、一昨年の秋で」

「お寅さんというのは？」

「――」

「奉公人か」

「え、奉公人のような」

「父親の万蔵はどんな人だ」

「良い人でしたが、お寅さんが来てからは、少しずつ変ってしまいました」

お寅さんというのは、お春の母親――つまり中屋万蔵の女房のお米が亡くなった後で入り込んで来た、万蔵の妾(めかけ)でもあるので

しょう。その名が出る度毎に、お春の表情の険しくなるのを平次は見遁す筈もありません。

「八、ちょいと来い」

「へエ」

「中屋へ乗込んで見ようと思うがどうだ」

「行って見ましょう。守袋を捜さなきゃ、わざわざ此処まで来たのは無駄骨折になるじゃありませんか」

「お春さんは、岡っ引を案内しては、中屋へ帰り難かろう、先へ帰るが宜い」

「ハイ」

お春はホッとした様子で、静かに二人に会釈すると、中屋の方へ立去ります。

「ね、親分、良い女でしょう」

ヒョイとしゃくった、八五郎の顎の長さ。

「気が多過ぎるよ、お前は」

「ヘッ、女房のない所為で」

亀の子のように首を縮めて、長い舌を出して見せる八五郎です。

四

中屋万蔵の家は、豪勢と言っても、それはやはり唯の百姓屋でした。深い植込の中に隠された、凄まじい贅沢な木口の家には、門も玄関も、家の中には長押もなく、荒々しい木造りと、不調和な家具調度が、神田から来た平次を、妙に寒々とした感じにさせます。

「ハイ、私は主人の万蔵で御座いますが」

迎えてくれたのは、四十五六のまだ元気な男でした。手織縞の布子に、藁しべで髪を結った、存分に質素な身扮も、何にかしら偽善的な不調和さを感じさせるところに、この家の生活には不純なものがあるのでしょう。

「俺は神田の平次だが、子供が死んだそうではないか」

「ハイ、昨夜伜の又七が、急に虫を起して引付けたらしく、そのまま、息が絶えてしまいました。――誰も知らずにおりましたが、今朝になって気が付いて大騒ぎをしたようなわけでございます」

「案内してくれ」

「これよ、誰か」

「ハイ」

声に応じて来たのは、三十前後の小気のきいた男でした。

「音か、御役人様方を、又七のところへ御案内申し上げてくれ」

「ヘエ、こうお出で下さいまし」

音吉は先に立って、奥の一と間へ案内しました。

「お前はこの家に何年くらい居るのだ」

「十五六年になります。私は遠縁で、唯の奉公と違いますので、ことのほか目を掛けて頂いております」

音吉は少し足を緩めながら、慎み深く言うのでした。髪の毛の濃い、髯の剃跡の青々とした、少し逞ましい感じのする男ですが、口調も顔の表情も柔和で、誰にでも頼母しがらせずには措かないと言った如才なさがあります。

「内儀のお米が死んだとき、何にか変なことがなかったのか」

「何んにもなかったと思いますが、――でも少し脆過ぎました。

結構な伯母さんでしたが」

「脆過ぎたというと」

「床へついてから、たった三日目に亡くなったのですから、誰でも変に思いましたが、でも一年半も前の事ですから」

音吉は絶望的に淋しい笑いを浮べるのでした。

「他に気の付いたことはないか」

「坊っちゃんの守袋（まもりぶくろ）が見えませんが――」

「それは大事な物でも入っていたのか」

「そんな気がしてなりません。亡くなった母親が、大変大事にさせて置きましたから」

「たったそれだけの事か」

「左様でございます」

音吉は黙り込んでしまいました。あまりお喋舌（しゃべり）が過ぎたことに、自分ながら気が付いたのでしょう。

奥の一と間に通ると、そこには又七の死骸を横たえて、経机の前に老番頭の和助が、つくねんと坐っておりました。

銭形平次と八五郎を、唯の弔問客（ちょうもんきゃく）と見たか、慇懃（いんぎん）を極めている癖に、宜い加減な挨拶をして、そっぽの方を向くのへ、音吉は追っ駈けるように何やら囁きました。

「え？　銭形の親分？　――そうか、それはそれは飛んだ御苦労様で」

打って変った調子に、平次は少しばかり胸を悪くしました。

又七の死骸に近づいて、片手拝みに拝んで、そっと顔の巾を取った平次は、思わずハッと息を呑みました。

「これは？」

十二というにしては、背丈のよく伸びた、丈夫そうな少年ですが、苦悩に歪んだ顔、飛出しそうな眼、斑になった頬の色、そして唇を噛んだらしく、少し古い血のこびり付いている様子など、全く只事ではありません。

「締められたんですね」

と八五郎。

「いや、喉に何んの変ったこともない」

「すると？」

「息を詰められたのだ。布団のようなもので、蒸し殺されたのかも知れない」

「検屍便覧には尻を見ろ――とありますね」

「それには及ぶまい、――これでは成程お寺で引受けないわけだ」

言うまでもなく其頃は、変死と見ると、寺方で葬いを引受けないのが不文律になっておりました。

「この子は昨日元気がよかったのか」

「ヘエ、大変な機嫌で御近所の子供さんたちと遊んで居りました」

答えたのは老番頭の和助でした。

「この部屋に一人で寝るのか」

「いえ、飛んだ怖がりで、たいてい私と一緒にこの部屋に寝ております」

横合から口を出したのは、若い番頭――この中屋の遠縁だという音吉でした。

「昨夜は？　――これは大事なことだ、間違いのないように返答をするのだ」

平次は念を押しました。

「私は養仙寺前の竹原屋まで用事を頼まれて参りましたが、あんまり遅くなって、泊めて頂きました。この節は辻斬や追剥が出て、この辺は物騒でございます」

「用事というのは？」

「ほんの些細なことでございます。――竹原屋の御新造に頼まれていた、仕入の金を届けるのをすっかり忘れて居りましたのと、もう一つ」

「？」

「坊っちゃん――の又七さんから、竹原屋のお姉様に、相談したいことがあるから、明日にも来てくれるようにという言伝を頼まれましたので」

「その仕入の金というのは？」

「竹原屋の御新造が、この家のお父さんにお願いして、商売物の仕入で急に入用になった、十五両の金を貸して頂きたいと、お手紙で頼んで来たのでございます。そのお使を申付けられたのは、まだ陽のある内でしたが、夕方から宵のうちは、ゴタゴタ雑用が重なって、外へ出かける暇もございません。遅くなると物騒だと知りながら、戌刻半（九時）過ぎに谷中まで出かけました」

音吉の話は非常によく筋が通ります。

五

「音さん、岡っ引が、来ているんだってね。いつもの術で、お前さんだけ良い子にならないでおくれ」

少し呟鳴りちらすような調子で、ガラガラとまくし立てながら、

部屋の中へ入って来たのは、パッと咲ききったような、爛熟(らんじゅく)した大年増でした。

「お寅さん」

音吉はあわてて飛付いて、その口でも塞(ふさ)ぎたいような様子ですが、それよりも驚いたのは銭形平次と八五郎が、苦りきって控(ひか)えたのを見た女自身でした。

「まア」

お寅と言って二十八、主人万蔵の身の廻りの世話をするという名目の奉公人で、曽(かつ)ては岡場所を泳ぎ廻った、山千海千のしたたか者――と、陰口を言われております。

「お前は何んだ」

その表情的な眼や、紅い唇に対して、八五郎はムカムカと反感がコミ上げた様子です。

「奉公人の、お寅ですよ、――勘忍して下さいな、親分、知らなかったんですもの」

ヘタヘタと崩折(くずお)れたところを見ると、長いあいだの不養生に蝕(むし)ばまれて、この女の肉体は見る蔭もない哀れなものです。骨細で青白い手、細い腰、薄い胴など、その表情的でカッと明るい顔に比べて、それは何んという情けないものでしょう。

「又七は人手に掛って死んだんだぜ、――岡っ引が来るのに、不思議はあるめえ」

「まア」

「お前は昨夜(ゆうべ)どこにいた、真っすぐに申し上げろ」

平次も少しムカムカした様子で、遠慮もなく突っかかって行きます。

「一と晩、旦那様の部屋にいましたよ。嘘だと思ったら、訊いて下さいな」

「八、お前はこの女を見張っていろ、俺はこの女の部屋を調べて来る」

平次は音吉に眼配せして、それを案内に立上がりました。

「まア、親分、それだけは勘弁して下さい。私は物の始末の良い方じゃないから、見られちゃ極り悪いものばかりですよ。家捜しされると知ったら、少しは片付けておくのでした――」

お寅はそう言いながら、平次の後を追いかけましたが、

「ならねえ」

「まア」

グイとその袖を引戻した八五郎、

「お前はここで、俺と睨めっこをしているんだ、――あんまり傍へ寄るな」

「まア、口惜しいねエ」

女は観念したものか、そこへヘタヘタと坐り込みました。鳥もちへ匂い袋をブラ下げたような女で、傍へ寄られると、八五郎でもあまり気味がよくありません。

その間に平次は、音吉を案内に、お寅の部屋へ入り込みました。丸窓なんかを切った、恐ろしく野暮っ度く気取った六畳ですが、部屋の中の雑然たる有様は、さすがの平次も手を下しようもありません。小道具と衣装と、こね廻したように散ばっている上、脂と汗と白粉のカクテルで、これが本当に青大将の匂いです。

いちおう調べては見ましたが、あまりの乱雑振りに、宜い加減にして切上げる外はありませんでした。

「こいつを調べた日にゃ、うけ合い盆前丸つぶれだよ」

「親分、――あの手筥が変じゃございませんか」

音吉に言われて、平次はもういちど引返しました。押入の中に、これぱかりは真っすぐに置いた手筥、その覆を取って見ると、ゴタゴタと小物を詰め込んだ中に、子供の守袋らしいものがチラリと見えるではありませんか。

「あった」

それを引出した平次。中を開けて見ると、身代りのお守護や、古ぼけた臍の緒書といっしょに、新しい半紙へ細字でベットリ書いて、細かく畳んだものが一つ入って居るのです。

「親分」

差しのぞく音吉の眼から避けるように、平次はそれを元の守袋に納めて、自分の内懐ろ深くしまい込みました。

「さア、これで宜し、――八五郎に守袋は見付かったと言ってくれ――俺は裏の方へ行って見る」

平次は音吉と別れて、ブラリと庭へ出ました。木立に囲まれた大百姓の大地主の家は、ゴミゴミした神田に住んでいる平次に取って、何もかも心地よく珍らしくもありそうです。

「おや、番頭さん」

「ヘイヘイ」

老番頭の和助は足を止めました。何やらせかせかと外廻りの用事をしている様子です。

「この家の戸締りはどうだ」

「ヘイ、主人はやかましい方で、ずいぶん厳重でございます。これだけの身上になりますと、人様の噂にも上りますので、ヘエ」

和助は無表情な顔を振り仰いで、揉手などをしております。

「その戸締りは誰が見るのだ」

「主人が宵のうちに一度店から奥からお勝手まで見廻ります」

「けさ又七の部屋の戸締りに変ったことはなかったのか」

「それが、不思議でございます。外から開けた様子もないのに、雨戸が桟も輪鍵も外れておりました」

「ゆうべ確かに締めたのだな」

「それは間違い御座いません。主人も不思議がっておりました。多分坊ちゃんが夜中に気分でも悪くて明けたことだろうと申しております」

「ちょいと、外からその辺を見せて貰おう」

「こうお出で下さいまし」

老番頭の和助に案内されて、平次は、死んだ又七の部屋の外に立っておりました。天気つづきの上、庭の土はよく踏み固められて、足跡もなんにもなく、戸袋から出して見た雨戸にも頑丈な敷居にも、外からコジ開けたらしい傷一つないのです。

「この雨戸は今朝閉ってはいたのだな」

「閉っておりました。私が開けたのですから間違いございません。——閉っては居りましたが、上下の桟も下りず、輪鍵も掛ってはおりませんでした」

「主人を呼んで来てくれ」

「ヘエ」

和助は飛んで行って、店から主人の万蔵を呼んで来ましたが、

「私は戸縛りだけはやかましい方で、昨夜も確かに見廻りました。そのとき伜はもう寝ておりましたが」

万蔵の言葉には、何んの疑いを挟む余地もなかったのです。

六

平次は中屋の家族全部を、又七の死骸を置いた、隣の部屋に集めました。その顔触れは主人の万蔵、妾のお寅を始め、嫁入った娘のお春、その亭主の治三郎、老番頭の和助、若い番頭音吉――以上六人で、それに平次と八五郎が加わって八人になります。

「さて、皆の衆、又七は確かに人手に掛って殺された――あれは誰が見てもわかることだが、私はいろいろ調べて、その下手人がわかったつもりだ。まず、これを見て貰いたい」

平次が取出したのは、暗号の文字を彫った鼈甲の櫛でした。

「この櫛には、わけのわからない文字が彫ってある。最初は、女の手で縫針で彫ったものと思ったが、縫針では滑って、斯ううまく彫れるものではない。これはやはり飾り屋などで使うタガネで彫ったものだ」

「――」

「ところでこの櫛の文字は、判じ物のようなもので、読むのに骨は折れたが、ともかく（遺書は又七の守袋にあり）と読めた。――その守袋は又七の死骸から抜取られて居たが、大方見当をつけて捜すと、わけもなくお寅の手筥からでてきた」

「まア」

頓狂な声を立てたのは当のお寅でした。

「――遺書というのはこれだ。仮名文字で書いてあるが私が読んで見るから、気をつけて聞いて貰おうか。

――私はいよいよ殺されるかも知れない。昨夜も夜中に眼をさますと、私の上に馬乗りになって、私の喉に匕首を当てていた者がありました。私は観念して眼をつぶると、覚られたと思ったらしくて、曲者はそのまま私の布団の上から下りてしまいましたが、いずれにしても、私は長いことはあるまいと思います。曲者は今晩もまた来るでしょう、いやいや曲者が来なくとも、近頃の私の呑む薬は、妙にホロ苦くて、あの薬を呑んでから一日一日と身体が弱るから、いずれは奪られる命にきまっております。私を殺そうとしている曲者の顔を見てから、私はもうすっかり観念してしまいました。その曲者は、――私の夫――

紙はこれで尽きております」

平次の読むのを聞いて、一座に凄まじい衝動の起ったのは当然のことですが、ことに主人万蔵の驚きようは大変でした。

「飛んでもない。私が、そんな、そんな」

いきなり立ち上がって、泳ぐような恰好になるのを、平次は静かに止めました。

「いや、びっくりするのは尤もだが、――安心して下さい。この遺書は真赤な偽物だ」

「えッ」

「櫛の隠し言葉も女の手ではなくて、男がタガネで彫ったものだ、――母親が死んで一年半も経ってから、娘の手へあの櫛が届けられるというのもおかしい。それにこの守袋の遺書は近頃書いたものので、一年半も十二三の丈夫な子供の守袋に入っていたものではない。脂の匂いも汗の汚点もないのが何よりの証拠だ。これは八

五郎の手に届けてこの平次に解かせ、主人の万蔵を縛らせようとした曲者の細工だ」

「――」

一座は黙りこくって、平次の言葉に聴入りました。凄まじい緊張です。

「――その上、又七を殺して、それも主人かお寅に疑いが向くようにした。お寅の手筥に守袋を突込んで、この私に捜し出させたのはそのためだ」

「――」

「曲者は女じゃない、そして夜中に外から声を掛けて、又七に雨戸を開けさせて入った男だ。――淋しがっている又七が、曲者の声を聞いて、一も二もなく、喜んで雨戸を開けた、――八、気をつけろ、曲者は逃げ腰になっているぞ」

平次の言葉の終るを待ちませんでした。パッと逃出した曲者、それに飛付いた八五郎は、庭へ転げ落ちて、二匹の犬っころのように揉み合ったのです。

「野郎ッ、骨を折らせやがるッ」

辛くも八五郎が組敷いて、キリキリと縄を打ったのは、何んと、遠縁の奉公人という、あの如才のない音吉ではありませんか。

× ×

「驚きましたね、あの音吉の野郎が下手人だったんですね」

「そうよ、俺はあの櫛を見た時から、あいつは臭いと思ったよ。あんな骨を折って遺書を見せる奴があるものか。それも書いた本人は一年半も前に死んでいるんだぜ」

平次とガラッ八は、縄付の音吉を番屋に預けて、ブラリブラリ

と神田へ帰る道でした。

初夏の江戸の町は爽やかに晴れて、本郷台の若葉は滴りそうです。

「恐ろしく手の混んだことをしたものですね」

「俺を釣るつもりでやった細工さ。あんまり凝って細工倒れになったのだよ、尤もあれまでに企まなきゃ、又七を殺して澄しては居られない筈だ」

「又七を殺せばどうなるでしょう」

「中屋の大身代が、遠縁の音吉に転げ込むじゃないか。下手人はお寅か義理の父親の万蔵ということになる」

「ヘエ、太え奴ですね」

「物騒だというのに、わざわざ夜遅くなってから谷中へ十五両の金を持って行ったのが術さ。泊ったには相違ないが、あの辺の茶屋は夜もろくに戸締りはしない。それに若夫婦二人と耳の遠い母親じゃ、音吉が夜半に外へ出ようが、帰って来ようが気にも留めないだろう」

「――」

「千駄木の中屋へ帰って、又七の部屋の外から戸を叩いた、淋しがりの又七は飛付いて開けてくれたんだろう。それを可哀想に布団で蒸し殺してそっと谷中へ帰ったのさ、尤も雨戸は閉めたが外から桟を下ろしたり輪鍵をかける工夫はなかった」

「なるほどね」

「それから、今日俺が中屋へ行って、音吉に逢って見ると、いろいろ腑に落ちない事があった。櫛の隠し文字を読んだ筈のない音吉が、守袋の大事な事を知って居たり、守袋をお寅の手筥から見

付けてくれたり。それにあの才走った如才のない音吉は、お寅にまでも気風を見抜かれている」

「ヘエ」

「竹原屋のお春がお前の伯母さんと懇意（こんい）だと知って、八五郎を道具に使ったのは驚くじゃないか、あれが本当の悪党だ、――中屋の万蔵か、――あれは唯（ただ）の金持だよ。妾狂（めかけぐる）いさえ止せば、貧乏人の振りをして、そっと贅沢をするだけの、下らない金持根性の男だよ、――女房のお米――又七やお春の母親は、病気で死んだのだろうよ。跡取がないとなると、音吉が急に悪法を描いたのだ」

平次の話は明快でした。

「良い心持ですね、親分」

「俺は人を縛って良い心持になった事はないが、――でもあのお春夫婦は本当に喜んでいたね」

そう言うのがせめてだったのです。

（編注）

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩　柚月

初出―「オール讀物」昭和二十二年六月号　文藝春秋社

底本―「銭形平次捕物全集」第八巻　河出書房　昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行　銭形倶楽部